（別紙２）

審査結果の要旨　　山本伸一

本論文は、17 世紀後半に世界各地のユダヤ人社会を席巻した、いわゆるシャブタイ派のメシア運動を思想的に再構成して、近世ユダヤ思想史に新たな視点を導入しようと試みたものであり、全４章で構成され、巻末に図版と資料の翻訳と文献目録を付す。

1665 年に始まったこの運動は、メシアとされたシャブタイ・ツヴィが翌年にイスラームに改宗し、正統派から異端として処断されて急速に終息したかに見えたが、イスラームに改宗した集団から正統派ユダヤ教への潜伏まで、この運動はさまざまな形で隠然とした影響力を及ぼしたと考えられてきた。G・ショーレムを筆頭とする先行研究は、これらの諸運動を「シャブタイ派」と概念付け、その枠組の中で穏健派や過激派として把握することに努めた。これに対して山本氏は、この概念自体が極めて曖昧で論者ごとに異なりながら研究の枠組は固定されたままであることに疑問を呈し、シャブタイ派という枠組を一旦取り払い、指導者の思想の展開としてこの運動の広がりを理解し直そうとした。その際に焦点となるのが、運動の中心的指導者ガザのナタン（1643－80）の思想動向である。

第１章で先行研究と著者の立場の相違が提示される。シャブタイ派は従来、アンティノミズム（反規範主義）を特徴とする運動として概念化された。これは、メシアの棄教は終末到来の挫折ではなく現行の律法が失効する必然的プロセスであり、メシア時代に信者は規範の拘束を免れるとする。これに対し氏はナタンの反規範主義は強烈な規範主義の上に成立しているとして、ナタン思想の特徴を規範と反規範の相補的性質に求めるべきとする。

第２章では、その相補的性質がナタンの著作の分析を通して明らかにされる。ナタンは、メシアの出現によってメシア時代の切迫を信じ、信者たちに罪の悔い改めの行いとして「修復（ティックーン）」を要請した。ツヴィの棄教に対してはこれをメシア時代の遅延と解釈し、信者には棄教前と同様に禁欲的な規範指導を徹底させた。その一方で、メシアの棄教をカバラー理論にかなうものとして反規範主義の理論で説明している。

山本氏によれば、この相補的性質はメシア運動初期の緊迫したナタンの世代でこそその緊張が持続したが、ナタン思想はその後、必然的に二つの方向へ向かったとする。それが第３章と第４章の主題となる。第３章は、ツヴィにならってイスラームに改宗したドンメ教団の著作から、ナタンの反規範主義との連続性を見出そうとする。また、第４章では、シャブタイ派思想と疑われた 18 世紀の著作『日々の歓びの書』を取り上げて、これがナタンの規範主義の思想を継承したと想定して、その連続性を証明しようとする。

本論文は、一次史料の扱いに不十分な点が残り、思想の連続性に関する実証性に物足りなさがあることは認められるが、ヘブライ語の一次史料と二次文献を入念に調べシャブタイ派運動の通説に挑戦する気概をもって思想史的な再構成を試みたことは、この分野における重要な貢献であり、本委員会は本論文を博士（文学）の学位の授与にふさわしいものと判断する。